

論点

少子高齢・人口減少社会を迎え、日本は瀕死の状態にある。とりわけ産業空洞化が進む地方の衰退は著しい。だが、国の財政が危機的状況にあり、中央からの所得再分配には頼れず、首都圏を機軸に日本全体が成長するモデルも限界にきている。地域から日本を立て直す新しい仕組みを構築しなければならぬ。

閉じた島国の発想からの脱却が必要だろう。日本と逆に世界の人口は今後急増に増える。この活力を取り込むことを考えるべきだ。

「グローバル都市」へ地方都市を変え、地方から知識立国・日本をリードした

次世代加速器の誘致

い。地域を開き、海外から直接、地方都市に人材を呼び込む。人の交流を通して都市としての知的価値を高めていく。様々な国籍の人々が雑居的に集まるのではなく、都市の歴史や文化を理解し地元住民とともに街づくりに参加する。地元若者が国際的な活動に自然と触れることができ、将来世界で活躍できる人材に育

州合同原子核研究機関)が持つ研究設備の次世代機である。花崗岩層地下1000mに全長30m、1mのトンネルを掘り、超伝導加速器を配置する。素粒子研究の最先端の拠点となる。

研究を支える産業の裾野も広い。加速器はがん治療装置など医療分野にも応用され、世界市場は3兆円規模といわれている。加速器

られてきた。世界の研究者の間では、この分野で高い技術を持つ日本の中で、岩手県北上山地と福岡・佐賀県境の青板山地が有力候補になっている。これが誘致できれば、世界から第一線の科学者が5000人、家族を含めれば1万人が来日する。この機会を活かし、ILC実現を機にグローバル都市のモデルをつくる、と

いのが私の考えた。課題は多い。第一に日本は大型国際プロジェクトの主導経験がない。国内の合意形成と諸外国の意見調整を同時に進める高度な交渉手腕が求められる。このプロセスの確立が必要で、関係省庁の連携は必須だ。

都市設計も重要になる。研究設備の整備だけでは諸外国の支持は得られない。外国人が家族で安心して暮らせるよう医療・教育などの生活基盤が必要になる。生活環境への配慮に欠け、整備が遅れた筑波研究学園都市の過ちを繰り返してはならない。民間の知恵を大いに活用すべきだろう。

イノベーションは人が起こす。多様な才能を世界から集め、停滞する現状を打破する。その契機となるILCの誘致を、日本の総力を結集し実現したい。

世界の力呼び込む



増田 寛也氏
元総務相。元国土交通大臣。東大公共政策大学院客員教授。日本の長期的な国家戦略を示す「日本創成会議」の座長。60歳。

つ。そのような都市を構想する必要がある。私が経済界や労働界の代表と構成する日本創成会議は、第一歩としてILC(国際リニアコライダー)誘致を提案した。ILCと

ILCは、2003年から各国が協力し世界に一つだけ建設する計画が進めら

を使った放射性廃棄物の半減期短縮の研究も進んでおり、実現すれば福島第一原発の処理のあり方も大きく変わる。ILCを核に次代を担う新しい産業を集積することも期待できる。

スイスの巨大加速器が将来の国民の生活や施設でビッグス粒子を安全を脅かすことばないのか。候補地の条件は活断層がなく、硬い安定岩盤であること、当地域は震害や風化がないこと、川流域・社鹿半島に至る複数の断層群であった。

日 報 論 壇

しかし、花こう岩は天然放射性で、どこで風化するともろくなるも大規模災害が起り、その間、逼迫気味の電圧を25万ボルトも必要だと条件に合致するので、候補地の近く、人工的改変力を加えればという。研究目的が達成されるれば近い将来、必

禍根残すI-LC誘致

小 綿 泰 樹

花こう岩は、活断層ではないと、巨大地下空間に崩落、間尺度で国民の不安を招来する。残された長

候補地は青森の下北や福島に近く、要請を拒否する。そのむごとは至難だろう。要請によってはI-LCも、跡地が最終処分場の利用期になれば、3・11大

元の利用期、震災のような地殻変動や未成熟な処分技術も相まって壊滅的な放射能汚染に見舞われる。初めから誘致ありきで復興に便策的姿勢を貫けば、未来の生命と環境に取り返しがつかない禍根を残すだろう。

最終処分場としての要請が来ることは必至である。I-LC利用の研究は、た。65歳 (岩手町 元技術者)

と市でるるる現なリ機年ブD、え、巨、国

12.8.28

(9) オピニオン

(第3種郵便物認可)

8月16日付「日報論壇」に国際リニアコラ

粒子と電子との反作用について指摘する投稿がありました。このことについて、県の考え方を述べさせていただきます。

I-LCは先日、質量の起源であるヒッグス粒子とみられる新粒子を発見したとの報道があったスイスのセルン(欧州合同原子核研究所)の加速器の次世代機(全長31~50m)の地下トンネル内に設置される超伝導加速器

により、電子とその反粒子(陽電子)を加速、衝突させる世界最先端の大規模研究施設です。

I-LCの目的は、ヒッグス粒子の発見です。ツクス粒子の発見は、



I-LC誘致で真の復興を

大平尚

それらの衝突の様子を測定・分析する技術等に最先端の技術が駆使されることから、がん治療装置や新たな材料開発など、さまざまな分野に応用され、新産業の創出や発展につながる

I-LCのトンネルは地下1000mに建設されることになり、例からも、その後も研究が継続されることと想定されますし、仮にI-LCの稼働が終了したとしても、真が核廃棄物の最終処分場への転用を認めるとはあ

現計画では20~30年とされています。しかし、これを乗り切ることが求められています。県ではI-LCを核として3千人を超える人もいわれる国内外の研究者が居住する国際的な科学技術研究地域の形成と関連産業の集積等を図ることが、経済効果と雇用を生む「真の復興」につながるとの考えから、その誘致に取り組んでいます。

県民の皆さまのご理解と、ご協力をよろしくお願い致します。

なく、ヒッグス粒子やツクス粒子や

その他の新粒子をセルンの加速器の数倍の感度で徹底的に調べ、宇宙創成の謎を解明することです。I-LCは電子・陽電子の加速や、

がることが期待できま

想定されませんが、道路や鉄道のトンネルと同様に、しっかりとした調査・設計を行い、安全したいと考えています。

このことにより、立地協定の締結等により確説、担保したいと考えています。

震災からの真の復興のために震災前の状態に戻すだけではな

54歳